

2023 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 文部科学大臣賞（最優秀賞）

きょうふのない世界

（原文は英語）

チママンダ・ケイトリン・ウゾエチ（8歳）

ナイジェリア

平和な世界とは、ぼう力や不正、きけんのきょうふを感じることはない世界です。それは、じゅうの音も、わたしと同じ年ぐらいの子どもたちを含め、人が死ぬ話も聞こえてこない世界です。

わたしたちは一番上の階に住んでいますが、わたしはごうとうやゆうかいがこわいので、ねる時はいつも部屋のまどをしめてねています。いつも外で変な音が聞こえると、じゅうの音かばく竹か、それともわたしの家の変あつ器がこわれたのかと思います。母は、空気を入れかえるためにまどを開けておきなさいといつもわたしに言い、何も起きないからとわたしを安心させていました。そうです。今年の5月のあの夕方までは、何も起きませんでした。

母と兄弟とわたしがいつもより少し早く家に着いてすぐに、大きな音が聞こえたのです。こわかったのですが、わたしたちはいつものそう音なのか、それともちがうものなのかどうか分かりませんでした。母がまどの外を見ましたが、何も見えませんでした。その後、女の人がさけんでいるのが聞こえたので、母は「ひょっとしたらその女の人はぼう力をふるわれているのかもしれない。無事かかくにんしないと」と言って走って外に出て行きました。母はしばらく外にいて、やっともどつてくると、女の人がごうとうにじゅうをつきつけられていたとわたしたちに話しました。その女の人の車や電話、かぎがうばわれ、赤ちゃんも取り上げられそうになっていたそうです。その女の人はふるえていたので、赤ちゃんをだっこするのを母が助け、また母と近所の人たちは、何とかしてぬすまれたものを取りもどそうとしました。

その女の人と赤ちゃんは、少し前に家に着いたわたしたちだったかもしれません。それはまるでホラーえい画のようでした。しかし、安全な場所のないホラーえい画とちがって、その女の人にとっては母が安全な場所となりました。むしするのではなく、こまっている人を母が助けたおかげで、その女の方は、母のうでの中で安心することができました。母や近所の人たちが思いやりの心で助けたことで、その女の方は安心することができました。

マイケル・ジャクソンの歌「We Are The World」は、「We are the ones who'll make a brighter day so let's start giving（わたしたちこそが、もっと明るい日にできる者なんだ、だから、さああた



えよう)」と言っています。わたしはずっと、その歌の中の「giving (あたえる)」はただお金を人にあげることだと思っていました。しかし、実は愛をあたえることを意味しているのだと今は分かります。にくんでいてはあたえることはできないからです。愛こそがわたしたちに本当に必要なものだと、今は分かります。やさしさや希望、理かい、思いやり、がまん、公平さ、喜び、調和、平和は愛によってもたらされるからです。

人には、特にわかいわたしたちには、それぞれ果たすべき役わりがあります。それは、未来はわたしたちにかかっているからです。わたしたちは未来を正しい方向に進めて行かなくてはなりません。だから、わたしは今、世界を愛で満たそうとみなさんによびかけます。愛に満ちた世界にきょうふはありません。なぜなら、あなたのとなりの人があなたにとっての安全な場所になるからです。となりの人の安全をかくにんするだけで、わたしたちは他の人たちにとっても安全な場所になれます。友だちではないからといって、もう学校で他の人たちをむしりません。学校で友だちがいじめられているのを見たら、もう放っておくようなことはしません。学校で自分の友だちだけにあいさつをするようなことはしません。クラスメートがペンを必要としているのを分かっているのに、自分のペンをひとりじめするようなことはもうしません。だれかが意地悪をしていると知ったら、わたしは親切にします。答えが間ちがっていてもクラスメートが質問に答えようとする時、わたしははげまします。友だちが意地悪をしていたら、わたしはその人たちに注意します。だれかが必要としていたら、わたしは手伝ってあげます。わたしは、わたしの平和な未来を、今より明るい世界をつくりたいのです。そして、それはわたし自身が始めることなのです。

ぼう力や不正、きけんをふやしたがる悪い人はいつの時代もいるでしょう。しかし、多くの愛とそのすべての成果があれば、良い人はいつも悪い人たちに勝ちます。きっと、そのような悪い人たちは愛を受けたことがないから悪いことをするのだと思います。わたしたちの愛のこもった言葉や行いは、平和な未来をつくる上で多くのプラスの変化をもたらすことができることを覚えておいてください。きょうふのない未来を。